

医療者のための 成功するメンタリングガイド

徳田安春 ● 監訳

〔評者〕 志水太郎 (獨協医大教授・総合診療医学)

まず、本書評を書かせていただくにあたって触れるべきこと。それは何をかくそう、評者(私)の最強メンターは本書の監訳者、徳田安春先生であるということである。徳田先生はどのようなメンターであったか？ それを語るには、本書で個人的に最重要章と感じる、Chapter 3をお読みいただきたい。同章の骨格となるポイント、すなわち「メンターでなく、メンティー自身の成長に有益なタスクを与えよ」「動き続けよ」「難しい対話に備えよ」「いつでもつながれるようにする」(詳細は本書をお読みください)などは、まさに往年の徳田(メンター)―志水(メンティー)の関係そのものを言語化したものである。徳田先生と出会ったのは2005年11月、東京都立墨東病院での徳田先生の講演で、自分はそのシャープかつ俯瞰的な指導に魅了され、徳田先生の行く先々に追随し、オンライン・オフライン問わず、バスの中で、飛行機の隣で、新幹線の往復で、フレッシュヒたちの中で、貴重な教えをスポンジのように学んだ。宝物のような時間だった。それは自分が米国に滞在した中でも後も継続したのである。「ジャーナルではレビューとエディトリアルを毎週フォローしてください」「私が診ます、といえは丸く収まるのです」「スピードと集中がカギです」など枚挙にいとまがないが、全てメンティーの自分がメンター

として拡散すべき“グレート・アントニオ”徳田の教えである。

いきなり Chapter 3 にフォーカスしたが、ここで本書の構成を紹介したい。本書は全 10 chapter からなり、メンターへ (Chapter 1-3)、メンティーへ (Chapter 4-7)、そしてメンター & メンティーへ (Chapter 8-10)、という 3 部構成に分けられている(さらに巻末に約 50 ページにわたるメンタリングの参考文献の数々の紹介もうれしい)。とはいえ、メンターはメンティーの章を、またメンティーはメンターの章を読むことで、相手の立場をおもひかえることができる。その結果、全ての読者は本書の全ページから重要な学びを得られるだろう。

本書の優れたところは他にもたくさんある。ダイバーシティ (Chapter 9) やミレニアル世代 (Chapter 8) にも配慮しているところは秀逸である。特に、世代間の違いでは、例えば評者が心酔する昭和プロレス式「プッシュアップとスクワット」でナンボ、はミレニアルには地雷(というかアウト)である。このような時代のギャップへの配慮も大事である。徳田先生の「年齢を重ねると時代にマッチした戦略を立案することが難しくなる(p.96)」はメンターにとって心すべき金言である。だからこそ、メンターとメンティーのお互いの振り返り (Chapter 10) と柔軟な心が必要ということにな



る。

序文にもある通り、メンタリングの関係は相互的であり、メンターはメンティーによって知の拡散を実現し、メンティーはメンターにより知へのガイドを得られる。しかしそれが Win-Win, Give and Take のようなドライな関係で終わらないのは、本書では明言して強調こそされてはいないものの、その文底で語られる、師弟愛ともいえるべき互いの信頼関係である。そう、究極的にはメンタリングとは愛だと思う。

本書はメンタリングという難しくとつづきににくいテーマを、米国を代表する Saint/Chopra という臨床教育 2 大巨頭がわかりやすく解説し、それが日本代表の臨床教育マイスター徳田安春 & 沖縄アソシエイツの手によって日本のあらゆる層にコモディティ化されたという、希代の名著ともいえる。2020 年、いや、2020 年台を通じた Must Buy といえるだろう。

A5・168 頁

2020 年 11 月

定価：本体 2,500 円＋税

[ISBN978-4-260-04311-3]

医学書院刊